

研究

保育所における「気になる」子どもの保護者支援

—保育者への質問紙調査より—

斎藤 愛子¹⁾, 中津 郁子²⁾, 栗飯原良造²⁾

〔論文要旨〕

A県内の保育者を対象に、保育者が経験した「気になる」子どもの状態や保護者支援、架空ケースにおける「気になる」子どもの見立て方などに関する質問紙調査を行った。その結果、96.6%の保育者が「気になる」子どもを保育した経験があった。そして、5～6歳児の保護者とのかわり方で「意識等のくいちがいが生じたり、「伝えて関係悪化」したりすることが他の年齢に比べて多いという回答結果であった。架空ケースの見立てでは、保育者はまず保育環境からケースを振り返り、保護者との関係づくりに重点をおいていた。また、家庭の問題と発達障害の疑いを同時に考えることは少ないという結果であった。

Key words : 保育士, 気になる子ども, 保護者支援

I. はじめに

近年、「気になる」子どもが増加していると言われ、これまでにさまざまな研究が行われてきている。しかし、研究者の注目する観点によって、「気になる」子ども像やその年齢が異なっている。また、診断がなされていないが対応に困っている状態が、日々保育現場で保育に従事する保育者にとって最も「気になる」ことであり、そこへの支援の必要性を感じる。

保育現場では、近年「気になる」子どもの保護者を中心とした保護者支援が保育者に求められている。しかし、保育者の担う役割が量・質ともに増大している中での支援であり、保育者は保護者支援に苦慮している現状がある。

そこで、本研究では保育者の「気になる」子どもの保護者への支援の実態や、架空ケースを提示することで、その見立て方や保護者支援の仕

方について検討し、考察することを目的とした。

本研究での「気になる」子どもとは、本郷ら¹⁾の研究に基づいて、「調査の時点では何らかの障害があるとは認定されていないが、保育者にとって保育が難しいと考えられている子ども」とした。

II. 対象と方法

1. 対象

A県内の協力依頼の得られた49園の保育所および認定子ども園の保育者245名を調査対象とした。

2. 調査方法

2007年8月から9月に無記名自記式質問紙を作成し、各園に5人の記入を依頼した。記入者の選定方法は各園に一任した。回収は、園ごとに郵送してもらい、一部は直接回収とした。

Support for Parents of Children with Special Educational Needs in Nursery Schools

〔2035〕

— A Questionnaire Survey of the Childcare Workers —

受付 08. 4. 21

Aiko SAITOU, Ikuko NAKATSU, Ryouzou AIHARA

採用 08.10. 8

1) 浜松市立南保育園 (保育士) 2) 鳴門教育大学 (研究職)

別刷請求先: 中津郁子 鳴門教育大学 〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島字中島748

Tel/Fax : 088-687-6294

1. 背景 年齢：5歳 性別：男
家族構成：父親、母親、本児、妹（2歳）
2. 保育所での特徴など
 - a. 友だちとのトラブルが多く、ちょっとしたことで興奮して、友だちをたたくことが多い。
 - b. 折り紙などの製作課題が不得意で、自分の嫌いな課題の時には部屋を飛び出すことが多い。
 - c. 一つのことに長い時間集中することが難しく、いろいろなものに注意が移りやすい。
 - d. 鬼ごっこなどのルールがある遊びにうまく参加できない。
ゲームでは一番にならないと気がすまない。
 - e. 知的には特に遅れがないように思える。
 - f. 家庭に大きな問題はないように思える。
 - g. 母親の話によれば、家庭では特に問題は感じていないとのことである。

図1 架空ケース⁵⁾

3. 調査内容

質問紙は、フェースシート項目、「気になる」子どもの年齢とその状態に関する20項目およびその保護者支援の実態に関する16項目であり、本郷²⁾、花田³⁾、徳田⁴⁾を基に作成し、当てはまる項目すべてに丸をつけてもらった。さらに、架空ケースにおける「気になる」子どもとその保護者支援に関することを本郷^{2,5)}を基に作成し、5件法で回答を求めた。そして、保育カウンセラーに求めるものや保護者支援に関する意見や考えを自由記述で聞いた。架空ケースを図1に示す。なお、本論文では保育カウンセラーに求めるもの等の自由記述についての掲載は一部省略する。

データの集計と解析にはSPSS15.0 for Windowsを使用し、有意水準は5%とした。

Ⅲ. 結 果

1. 対象者の属性

176名の回答を分析対象とした（有効回収率71.8%）。回答者の年齢は20歳代が最も多く48人（27.3%）で、30歳代が38人（21.6%）で最も少なかったが、回答者の年齢に偏りは見られなかった。経験年数では、21年以上が61人（34.7%）と最も多く、初任が3人（1.7%）と最も少なかった。担っている役割については、常勤保育士が109人（61.9%）で最も多く、次いで主任が30人（17.0%）であった。

2. 「気になる」子どもとその保護者支援の実態に関する項目について

i) 「気になる」子どもの有無

保育者が今まで担当したクラスに「気になる」子どもがいたかどうかを尋ねた結果、170人（96.6%）と高い割合で保育者は「気になる」子どもを担当した経験があった。

ii) 「気になる」子どもの年齢

保育者がかかわってきた中で最も「気になる」子ども1名を尋ねた結果、3歳児に「気になる」子どもが47人（26.7%）と最も多く、続いて5歳児に36人（20.5%）という結果であった。

iii) 「気になる」子どもの保護者とのかわりで困難に感じたこと

複数回答で回答を求めた。その結果、「『気になる』ことの伝え方」が最も多く、121名（68.8%）の保育者が回答していた。

保護者とのかわりで困難に感じたことを、回答者の各人がどのような項目を同時に選んだのかを調べるために多重応答分析を行った。カテゴリーポイントの結合プロットを図2に示す。その結果、「『気になる』ことを切り出すタイミング」、「『気になる』ことの伝え方」、「子どもの様子に問題を感じていない」を保育者が同時に回答していた。また、「意識や考え方のくいちがいがある」、「『気になる』ことを受け入れられない」、「子どもを甘やかす態度」を同時に回答していた。

「気になる」子どもの年齢とその保護者へのかわりの困難さの関連性を調べるために χ^2 検定を行った（表1）。「意識等のくいちがい」、「伝えて関係悪化」、「子どもに関心がない態度」、「しつけに厳しすぎる態度」の4項目でそれぞれ偏りが有意であり、5～6歳児の「気になる」子どもの保護者とのかわりで、「意識等のくいちがい」、「伝えて関係悪化」、「しつけに厳しすぎる態度」を困難だと感じる人が多かった。

iv) 「気になる」子どもの保護者とのかわりにおける工夫

「気になる」子どもの保護者とのかわりで工夫したこと・うまくいったことについて自由記述形式で回答を求めた。98名（55.7%）から回答があった。記述内容をカテゴリーに分けると、＜保護者への伝え方（74）＞、＜保護者

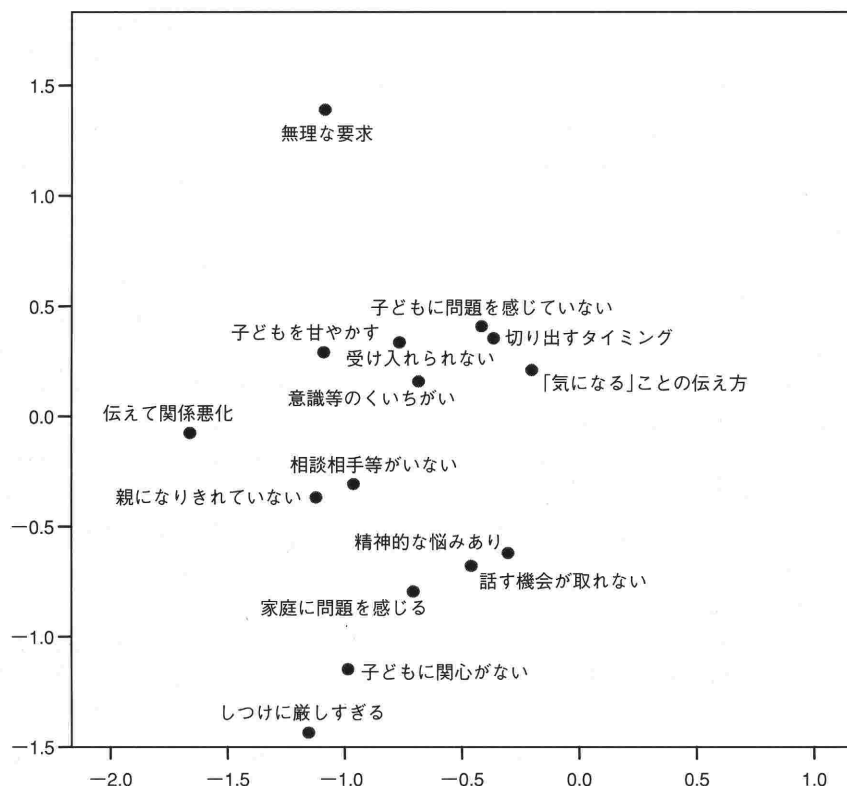


図2 「気になる」子どもの保護者とのかかわりで困難に感じたこと

表1 「気になる」子どもの年齢と保護者のかかわりの難しさ

項目	有無／ 年齢	0～ 2歳	3～ 4歳	5～ 6歳	χ ² 検定
意識等の くいちがい	該当	20 (0.1)	23 (-2.9)	27 (3.1)	11.55**
	該当なし	26 (-0.1)	52 (2.9)	16 (-3.1)	
伝えて 関係悪化	該当	1 (-1.7)	2 (-2.3)	10 (4.3)	18.77**
	該当なし	45 -1.7	73 -2.3	33 (-4.3)	
子どもに 関心がない	該当	1 (-2.6)	12 (0.9)	9 (1.7)	7.53*
	該当なし	45 (2.6)	63 (-0.9)	34 (-1.7)	
しつちに 厳しすぎる	該当	1 (-1.3)	3 (-1.0)	6 (2.5)	6.45*
	該当なし	45 (1.3)	72 (1.0)	37 (-2.5)	

() 調整された残差 * $p < .05$ ** $p < .01$

との関係作り (20) > , <他機関への紹介・他職種との連携 (18) > , <保護者の思いを聞く (9) > , <保育者間の連携 (5) > , <子どもを通してのアプローチ (3) > , <その他 (5) > の7つに分けられた。<保護者への伝え方 (74) > では、「子どもの良い面から伝える (28)」, 「伝える手段の工夫 (13)」や「具体的に伝える (11)」などが述べられていた。(() 内の数字は記述数)

3. 架空ケースの見立て方と保護者支援

i) 架空ケースの見立て方

架空ケースを見立てる5項目(1. 家庭環境が気になる。2. 保護者とのかかわりはとりやすい。3. 本児には発達障害の疑いがある→「発達障害の疑い」と略す。4. 保育所でのかかわり方を検討する必要がある→「保育所でのかかわり方検討」と略す。5. 相談機関・巡回の相談員との連携を検討する必要がある→「他機関との連携検討」と略す。)とこのケースにおけ

る保護者への支援方法についての24項目で構成した。

架空ケースを見立てる5項目で特徴があったのは「保育所でのかかわり方検討」と「他機関との連携検討」であった。「保育所でのかかわり方検討」は平均4.51であり、回答が5（あてはまる）に99人と集中していた。「他機関との連携検討」についても、平均4.18であり、回答が4（ややあてはまる）に57人と5（あてはまる）に79人と集中していた。

ii) 架空ケースの見立て方5項目間の関連性

架空ケースの見立て方5項目間の関連性をピアソンの相関係数を用いて調べた。その結果、表2のように「家庭環境が気になる」と「保護者とのかかわりはとりやすい（反）」、「保護者とのかかわりはとりやすい（反）」と「保育所でのかかわり方検討」などの5つの項目間で正の相関が見られた。「家庭環境が気になる」と「発達障害の疑い検討」で負の相関が見られた。

iii) 架空ケースにおける保護者支援

架空ケースにおける保護者支援の24項目は、本郷²⁾により＜手段・場面＞、＜内容＞、＜配慮・心がけ＞に分類されている。＜手段・場面＞では、「送迎時に話す」が平均4.64で、回答が5（あてはまる）に集中していた。＜内容＞では、「様子全般を話す」、「保育所での取り組みを話す」、「家での様子を聞く」、「子育ての悩みを聞く」、「保育所への要望を聞く」の5項目で回答が5に集中していた。＜配慮・心がけ＞では、「事実をはっきりと伝える」と「他の保護者の理解を得る」以外の7つの項目で回答が5に集中していた。

iv) 架空ケースの見立て方と保護者支援

見立ての5項目と保護者への支援の24項目との関連性をピアソンの相関係数を用いて調べた（表3）。その結果、「家庭環境が気になる」は＜手

段・場面＞の「連絡帳でのやりとり」、＜内容＞の「様子全般を話す」、「気になる状態を話す」、「家での接し方を話す」、「成長の見通しを話す」、「家での様子を聞く」、＜配慮・心がけ＞の「話を十分に聞く」、「理解しやすく話す」、「事実をはっきりと伝える」、「責めない」と正の相関が見られた。

「保護者とのかかわりはとりやすい（反）」は＜内容＞の「家での様子を聞く」、＜配慮・心がけ＞の「理解しやすく話す」、「肯定的なことも交えて話す」と正の相関が見られ、＜手段＞の「メール・手紙」と負の相関が見られた。

「発達障害の疑い」は＜内容＞の「専門情報を伝える」、＜配慮・心がけ＞の「他の保護者の理解を得る」と正の相関が見られ、＜手段・場面＞の「保護者会等で話す」と負の相関が見られた。

「保育所でのかかわり方検討」は＜手段・場面＞の「送迎時に話す」、＜内容＞の「様子全般を話す」、「気になる状態を話す」、「取り組みを話す」、「家庭での様子を聞く」、「悩みを聞く」、「要望を聞く」、＜配慮・心がけ＞の「ゆったりとした雰囲気」、「十分に聞く」、「思いを受けとめる」、「理解しやすく話す」、「肯定的なことも交えて話す」、「責めない」、「希望がもてるよう接する」、「他の保護者の理解を得る」と正の相関が見られた。一方、＜手段・場面＞の「電話で話す」と負の相関が見られた。

「他機関との連携検討」は＜手段・場面＞の「個別相談」、＜内容＞の「専門情報を伝える」、「悩みを聞く」、＜配慮・心がけ＞の「ゆったりとした雰囲気」、「十分に聞く」、「思いを受けとめる」、「肯定的なことも交えて話す」、「責めない」、「他の保護者の理解を得る」と正の相関が見られた。一方、＜手段・場面＞の「連絡帳でのやりとり」と負の相関が見られた。

表2 架空ケースの見立て5項目間の相関

項目	家庭環境	保護者とのかかわり(反)	発達障害の疑い	保育所でのかかわり方	他機関との連携
家庭環境	1.00				
保護者とのかかわり(反)	.30**	1.00			
発達障害の疑い	-.20**	-.01	1.00		
保育所でのかかわり方	.14	.19*	.17*	1.00	
他機関との連携	-.04	.03	.57**	.29**	1.00

* $p < .05$ ** $p < .01$

表3 架空ケースの見立てと保護者支援

項 目		見 立 て				
		家庭環境	保護者との かかわり (反)	発達障害の疑い	保育所での かかわり方	他機関との連携
手段・ 場面	送迎時に話す	.09	.04	-.08	.23**	.07
	連絡帳でのやりとり	.19*	.12	-.13	.04	-.18*
	電話で話す	.00	-.08	.03	-.20*	.03
	メール・手紙で伝える	-.05	-.18*	.00	-.12	.02
	保護者会等で話す	.06	.02	-.26**	-.13	-.12
	相談日を決めて個別に話す	-.03	-.08	.13	.07	.22**
内 容	様子全般を話す	.15*	.12	-.06	.19*	.00
	気になる状態を話す	.17*	-.03	.06	.27**	.09
	保育所での取り組みを話す	.15	-.02	-.02	.29**	.05
	家での接し方を話す	.31**	.02	-.05	.11	.00
	成長の見通しを話す	.19*	.06	.00	.13	.05
	専門情報を伝える	-.04	-.08	.36**	.10	.37**
	家での様子を聞く	.18*	.15*	-.07	.29**	.08
	子育ての悩みを聞く	.08	.04	.10	.24**	.24**
配慮・ 心がけ	保育所への要望を聞く	.11	-.04	.09	.27**	.14
	ゆったりとした雰囲気ですす	.09	.08	.09	.29**	.18*
	話を十分に聞く	.13*	.08	.12	.28**	.20*
	思いを受けとめる	.05	.06	.05	.30**	.15*
	理解しやすく話す	.17*	.16*	.03	.37**	.15
	肯定的なことも交えて話す	.09	.14*	.02	.31**	.17*
	事実をはっきりと伝える	.18*	.02	-.06	-.01	.02
	責めない	.15*	.13	.00	.22**	.16*
	希望がもてるよう接する	.12	.03	-.05	.18*	.04
	他の保護者の理解を得る	.11	.06	.16*	.17*	.17*

* $p < .05$ ** $p < .01$

IV. 考 察

1. 保育者の「気になる」子どもとその保護者への支援

調査結果から回答者のほとんどが「気になる」子どもを担当していたが、これは、各園5人の回答者の選出を園に任せたこと、経験年数の長い保育者が多く回答したことなどが影響しているかも知れない。

保育者は「気になる」ことの保護者への伝え方に悩みつつも、保護者との関係づくりを重視していた。「気になる」ことの伝え方次第で保護者との関係が壊れてしまう。東山⁶⁾は保育者と保護者との関係性について、反発や誤解のないように子どものことを伝えられるかどうかは、親との間の信頼関係であるという。親の話を傾聴し気持ちを受け止めることが大切である。保育者は傾聴しつつ親への伝え方を工夫していることがうかがえる。

5～6歳児の子どもが「気になる」子どもとして保育者の目に映りやすく、他の年齢に比べ

て、保育者と保護者との間に「意識のくいちがい」が生じたり、「気になる」ことを「伝えて関係が悪化」したりすることが多いのは、就学を見据えて、子どもの成長・発達が気にかかる保育者の保護者へのかかわり方が影響しているとも考えられる。保育者が就学前の相談に行つてほしくても、保護者と認識の違いがあると伝えることが難しい。小学校入学を見据えて、どのようなアプローチをするのが「気になる」子どもとその保護者への支援において大切な事柄であると考えられる。

2. 架空ケースの見立て方と保護者支援

架空ケースの見立て方で保育者は保育環境からまずケースを振り返ると共に、保育所でのかかわり方として保護者との関係づくりに重点をおいていた。小林ら⁷⁾によると、保育者は保護者との協働的な関係を築くために、「子どもたちのために」という目的を共有していると述べている。保育者は、その協働的な関係を築くために努力しているのではないだろうか。

子どもが「気になる」と感じるときに、他機関との連携も視野に入れ、保護者との関係性をより重視することがわかった。一方、家庭の問題と発達障害の疑いを同時に考えることは少なかった。杉山⁸⁾は被虐待児を第四の発達障害と呼んでいる。下野⁹⁾は、家庭環境によって「気になる」行動があらわれている場合、また、「気になる」子どもの育てにくさが家庭に影響を与えている場合の両側面から捉えることの必要性を述べている。保育者は、「気になる」というアンテナを高くし、複数の要因を同時に視野にいられて考えていくことが必要である。

3. 今後の課題

保育者が実際にかかわったケースについての検討の困難さのため、本研究では架空のケースによる「気になる」子どもの保護者支援を検討しようとした。今後は、実際のケースを検討することが必要である。

また、就学前期の「気になる」子どもの保護者をいかに支えていくのかという視点と「気になる」子どもの状態像の違いによって、保護者支援の仕方がどのように異なるかについての検討が課題である。

謝 辞

本研究をはじめるにあたりご助言をいただきました東北大学の本郷一夫先生に深謝致します。そして、この調査にご協力いただいたA県の保育者の方々に深く感謝します。

文 献

- 1) 本郷一夫, 澤江幸則, 鈴木智子, 他. 保育所における「気になる」子どもの行動と特徴と保育者の対応に関する調査研究. 発達障害研究 2003; 25 (1): 50-61.
- 2) 本郷一夫(編著). 保育の場における「気になる」子どもの理解と対応—特別支援教育への接統一. ブレーン出版 2006: 10-11, 30.
- 3) 花田裕子. 保育士が認識している不適切な親の育児態度と子どもの問題行動—育児支援における精神看護の役割—. 長崎大学医学部保健学科紀要 2004; 17 (2): 5-16.
- 4) 徳田克己. 保育者の感じる「対応に困る保護者」.
- 実践人間学 2000; 4: 33-38.
- 5) 本郷一夫. 社会・文化的文脈のなかでの支援発達. ミネルヴァ書房 2003; 93 (24): 66-71.
- 6) 東山弘子. 幼児保育とカウンセリング. ミネルヴァ書房 1995: 63-77.
- 7) 小林 功, 高柳恭子, 岩淵千鶴子, 五十嵐市郎, 大場美穂子, 前原由紀, 稲川知美, 星野さやか. 保護者との協働的な関係を築くために, 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 2006; 29: 395-404.
- 8) 杉山登志郎. こども虐待という第四の発達障害. 学習研究社(学研) 2007.
- 9) 下野未紗子, 稲富眞彦. 保育所における「気になる」子ども—行動特徴, 保育者の対応, 親子関係について—. 高知大学教育学部研究報告 2007; 67: 11-20.

[Summary]

A questionnaire survey was conducted of childcare workers in Prefecture A about features of "special educational needs" children who they encountered and support to the parents/guardians of such children, and how to assess "special educational needs" children (imaginary case). The survey revealed that 96.6% of the childcare workers investigated had encountered "special educational needs" children. The workers had experienced "discrepancy of awareness, etc. from parents/guardians" or "loss of favorable relationship with parents/guardians after disclosure of the child's problem" more frequently in the care of 5- or 6-year-old children than in the care of children of other ages. When assessing imaginary "special educational needs" case, workers tended to focus on reviewing the environments for childcare and establishing a close relationship with the parents/guardians. It was rare for childcare workers to pay attention simultaneously to both family issues and the possibility of disturbed child development.

[Key words]

childcare worker, special educationally needed children, support to the parent